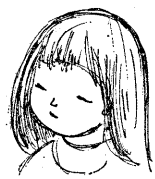
# ふれあいを求めて

## ―高槻市立幼稚園養護補助教員の実践報告―



高槻市は大阪府下の衛星都市として戦後人口が急増し、従って学校建設に追われ続けている状態ですが、市立幼稚園は昭和三十年度開設以来全入というたてまえで、各小学校毎に一年保育が付設されています。

また市立教育研究所で過去六年ほど「うの花学級」として、障害幼児の通級の場が実施されてきましたが、昭和四十八年度より「市立うの花養護幼稚園」となり、三歳からの障害幼児（精薄、情緒障害）七十名程が教育を受けています。うの花養護幼稚園で三歳、四歳を過ごしてきた子どもで、健体児の中へ入れた方が伸びるであろうと診断された子ども、また地域の幼稚園に入れたいと親が願う子どもなどが、就園指導委員会の指導のもとに、毎年市立幼稚園に入って来ます。療育センターなどから入って来る肢体不自由児や、家庭からその障害に気付かずに入って来る子どもなど、年々その数は増加しています。

昭和四十九年度より高槻市では、市立幼稚園に障害児を入れるために養護教育担当の補助教員を配置することに決めました。四十九年度は五人、五十年度は七人、五十一年度は九人が配置されました。

補助教員が集まり、未経験な者同志ですが無我夢中で障害児たちとふれ合って来たことを、観察記録をもとにして『ふれあい』と題してまとめてみました。その中の一端を掲載させて頂き、多くの皆様からの御批判、御指導を受けたいと思います。

**○浜田和美○**

高槻市の障害児教育について、その取り組み方など各園に任されているが、私の園では、うの花養護幼稚園をへて来たダウン症

のY子と、家庭からのK君（自閉的傾向で言語発達遅滞）の二人を四十人の級に受け入れ、補助教員である私が副担任となった。ただし、全職員に理解してもらおうと、職員会議や雑談の中でも、どんどん問題を出していった。当園では自由遊びが主体であり、自分の好きな場所で好きな遊びをみつけて遊ぶという実態の中で、当然障害児も担任外の教師とふれる機会が多く、障害児教育は園全体で取り組まなければならないと思ったからである。

K君は幼稚園に入るまではあまり外で遊ぶことがなかったので、身体を使う遊びには全く経験がなかった。体育的な遊びをする時には彼のそばにくっついて励ましたり、抱いて助けてやったりしなければならなかった。それでもKは全身に力を入れてその場から逃れようとしたり、こちらが「それじゃ今度しようね」と言うまで泣きベソをかいていた。言葉も、視線を合わすことから指導し、オーム返しから始めた。こんなKであったが、五月頃にふとしたきっかけから回旋塔に興味を持ち、乗ってぐるぐる回っている時の顔は生き生きとして、いつもうつむきかげんの視線を持つKとは別人のようであった。その後も努めて外遊びをさせるようにした。

二学期になると、それまで入りたがらなかった体育館へも平気で入るようになった。

二学期には運動会がある。K君もYちゃんも一緒にできて、全体的にもレベルを下げるのではなく、クラス意識を持って楽しくできるもの……となるとまず担任の先生が頭を抱えこんだ。いろいろ話し合った結果「チビッコ・インディアン」をすることになった。合図でスタートして思い切り走り、その次はリングをくぐり、マットの上を這う。次は跳び箱をよじ登り、すだれのような波をくぐり抜け、最後は自分たちで作ったボール箱のロボットの中を通り抜けてゴールインというのにした。順位争いとかリレーになると、どうしてもうまくいかないので、教師が大体の合間をみて合図を送った。当日はKもYも二倍の時間を費やしたが、一生懸命に這ったり跳び箱を越えたりして、周囲から暖かい声援や拍手が湧いた。お母さんたちの競技の時は、それまで退屈そうに座っていたKが、急に「ママがんばれ」と大きな声を出したのである。周囲の子どもたちもそれにつられて「K君のおばちゃんがんばれ」と大合唱になり、Kは嬉しくて仕方がなかったのか、とうとう飛び出してお母さんのそばまで走っていった。フォークダンスの時なども動作が大分遅れるが、相手の子はびくともせず、ペアをきちんと組んで踊ってくれた。

二学期の終り頃には、私たちが「これしようか」と誘うと言葉の反応は出ないが、泣いて自分の意志を出してきた。今までだと

いやそうな顔をしてお義理のようにやっていたのに、この行動はKにとって自分の意志を出すという大変良い方向に向かってきたのではないかと、教師たちで話し合った。この時期になると行動範囲も広くなり、大好きな自動車が通ると、走って行ってナンバーを見るのである。教師としては目が離せなかった。

三学期の劇遊びでは、オペレッタ「森のしたてや」をした。Kは鳩になった。したてやさんの子どもがKに「何色の洋服にしますか？」ときくと、Kは「何色の洋服にしますか？　えとね、みずいろがいい」と答える。前もって何色が良いか決めておいて、したてやさんがその色の鳩のかぶりものを出すのだが、Kはその都度言う色が変わるので、したてやさんは大あわてであった。今までの参観日だと、母親の顔が見えると泣いたり、そばに寄っていったりしていたが、その日は最後までベソもかかずに頑張った。見ていたお母さんの方が嬉しさに、劇の途中から泣き出してしまった。このあたりからKは比較的自分の意志を言葉（一語文であるが）で表わすようになったが、相変わらず情緒的に浮き沈みがあった。

以上K児の一年の大体の行動を追ってみた。このようにK児と担任のH先生、クラスの友だち、私とのふれ合いは家庭と随分異なるものだったであろうが、その中での成長ぶりは目を見はるものであった。中でも最も大切なものは、健体児とのふれあいであったと思う。教師の言葉かけよりも、子ども同士の会話や思いやりのある行動が、Kにとっては一段ときめがあり、見ていても涙の出るような感動を覚えたことである。

前に述べたように、もう一人、ダウン症のY子にも同様にかかわってきた。Y子はとても元気な明るい子で、運動的なことは負けないものも多く持っていたが、部屋の中の動作では、いつもこの二人が遅く、最下位争いだった。

しかしこの二人がクラスの中に居たため、子どもたちには、思いやりや優しい心が自然に身についてきたように思う。子どもの状態をよく見きわめ、適切な場所を保障していくのは教師や保護者の役割であると思うが、できる限り健体児と一緒の教育が必要であると思う。私は一年間副担任としてかかわってきた中で、K児、Y子を軸にしてお互いに伸びてゆく姿をまのあたりに見たように思う。

（如是幼稚園）

**○坪井晴美○**

昭和四十九年度に初めて障害児と接した私は、T児に付き、生活習慣から園生活の様々な行動に対して助言をしてきました。子どもたちから「先生はTちゃの先生やろ？」「Tちゃんのお母さ

んか？」という声がきかれ、ハッとしてそれ迄の自分とT児とのかかわり方を考えさせられたこともあります。

T児は自閉的傾向を持った子どもでした。時には「蝶々まわり」のようなものを百二十回もしたことがあります。それが次第に減り、生活や体調のリズムが乱れた時にしか見られなくなりました。最初は表情がなく、言葉かけをしても振り向きませんでした。言葉も一語文のオウム返しでした。そうしているうちに、いつしか私や担任などの身近な者に笑うようになり、抱いたり髪の毛をさわられることを拒まなくなりました。語彙数も次第に増え、三学期には簡単な経験を伝えるようになりました。またこの時期になると、教師が他の子どもと遊んでいると嫉妬し、泣いて関心を引こうとしました。

この年は一つ一つのことを暗中模索しながらやっていました。手さぐりの状態で一年を過ごして、よかったと思ったのは、マン・ツー・マンで付いて心の疎通ができ、T児の成長のきっかけを作れたことです。

しかし昭和五十年度にかかわった子どもに関しては、マン・ツー・マンでする部分と、集団のかかわりを見守っていく姿勢が要求されました。

I児は、うの花養護幼稚園から来ましたので、幼稚園生活の流れを知っていて、入園当初は得意満面でした。知っている歌が出て来ると得意になって歌います。図鑑の虫や花を見て、実にその場にマッチした表現をします。従って障害の程度も軽く「大丈夫」というように見ていました。ところが月日が経つにつれ、I児自身が他の子どもとの差を感じ取って不安感を持ち、自分が安定できることを長い時間やって、一度はずれるとなかなか活動に入れないというようになってきました。他の子に馬鹿扱いされたり、下手くそなどと言われるとオドオドしてしまい、泣きそうになってしまいます。家庭でも年子の妹と比較されると自信をなくし、「僕はできない」と思い、やる気になるまで時間がかかるといった具合です。感受性が強く自信を失いやすい反面、自分のものとしてのみ込んでしまうと得意になるといった風で、自我がまだ充分に形成されていないと思われました。

このように表面的にとらえると軽度に見えても、行動にひずみがあったりする場合があり、一見して普通児集団の刺激を受ける準備ができているように見えても、その障害の背景や実態を把握していないと、通り過ぎてしまって、結局は他の子どもの中に溶け込んで行けなくしてしまう危険性があると思います。障害児が入っているクラスが一歩出遅れる場合も多々あると思います。けれど悪い意味で障害児がクラスの中、あるいは幼稚園の中で浮き

ぼりにされないよう、保育はもちろん、園行事のあり方も考え直さないといけないと思います。その場合、例年のようにうまくいかないこともありましょうし、程度を落とさなくてはいけない場合も出て来ると思います。そうした時に障害児を受け入れていないクラスの先生、園の上の者の考えも一致していないと、園としてのまとまりがちぐはぐなものになってしまう気がします。

（北大冠幼稚園）

## ○佐々木久子○

N君はダウン症で、入園当初は表情も乏しく、部屋の隅でじっとしていたり、床に寝ころがっていて、こちらの話しかけにも何の反応も示さない状態でした。

五月に入り集団遊びが活発になって来た頃、子どもたちがN君に何やら話しかけていることもありましたが、言葉が出ていないためか、赤ちゃんをあやすようにしていて、いつのまにかどこかへ消えてしまうというふうでした。私たちもこれといった指導法も持たないまま、自然のまま受けとめることしかできず、N君の好きなことは何だろう、できることは何だろうと考え、遊びを通してまずはN君とふれあうことに多くの時間を費やしてきました。

五月中旬、この日は晴れていて大勢の子どもたちが外で遊んでいました。私が、「ブーン、ブーン、飛行機が飛んできましたよ」と手を広げて運動場をかけまわると、「わあ！ 先生よせて！ ブーン、ブーン」と子どもたちが集まって来ました。するといつのまにかN君もよって来て、子どもたちに囲まれた状態になったのです。

私「もう一度空を飛ぶよ」

子どもたち「わあ！ ブーン、ブーン」

私「N君も飛ぶよ、出発!!」

みんなが「出発!!」と口々に言い出すと、N君も両手を広げて先頭に走り出したのでした。「しゅば……」と言いながら。その声は子どもたちにも確かに聞こえたのです。

「こいつ、しゃべりよる。出発ゆうたよ、先生」

「N君、出発ゆったね。先生もみんなも聞こえたよ。みんな聞こえたね」

「うん、きこえたよ」

それ以来N君をとりまく子どもたちも急に増え、何人かがN君に関心を持つようになりました。

そして七月、私は次のようなことを試みました。

「N君、今日は先生とボタンはめの競争しよう。できたら大き

な声でできたと言うのよ」
Nは首を振り、うなずきます。
「用意ドン」
「よ……どん……」
しばらくして「できた」と両手を上げて大きな声で言いました。
まわりの子どもたちもしばらくN君と競争したりして、N君が自分でとめられると、
「N君自分で服着たで。ボタンも早くとめられた」
と手をたたいて喜びます。
だんだんやる気が出て来て、表情も豊かになり、ふざけるようにもなって来ました。きっとこの頃、N君の心の中に人への興味、関心、信頼が育って来ていたのだろうと思います。
次に絵カード遊びを取り入れてみました。
「N君の好きなものが一杯あるね。先生は風船がほしいなあ。N君は車かな?」
「バス……バス……」
「N君、バスちょうだい。ここに入れよう」と右側を指摘すると、「バス……バス……」と言いながら、赤いバスと青いバスを入れます。
「今度は風船ちょうだい」
「ふぅせん……ふぅせん……」と言いながら、手わたしてくれます。
「こんな風船で空を飛んだら気持ちいいやろなあ。風船って軽いのよ」
などと、言葉を多く投げかけました。
こういう試みが果たして治療効果につながるのかは疑問ですが、あせらず、子どもたちの可能性を見出して伸ばそうと、ささやかな歩みを続けて来ました。
そして三学期になり、朝、どの先生を見ても自分から「おはよう」が言えるようになりました。
N君との一年間は、暗中模索でいろいろ困ったこともありましたし、まだまだ子どもの心の中に入れない私ですが、何とかして彼らの心の内部に明るい灯をともしたいと頑張っています。自己満足かもしれませんが、道らしきものが少し見えて来たような気がします。

（西大冠幼稚園）

○田中克美○

私の園には五十年度は、E児、M児、T児の三人が入って来ました。最初の職員会議で、多動で危険なことの多いE児を私が担

当することに決まりました。当初クラスにとけこめず、自己本意に動きまわり、友だちとかかわろうとしませんでしたが、徐々に集団からはみだすことも少なくなり、運動会が終った頃には、少しずつ仲間として自分をおさえて集団に参加できるようになりました。

そこで次にM児とT児を担当することになりました。自閉的なM児は心の門をたたけども……。まず彼と仲の良い友だちになり、信頼関係を深めつつ、彼からの働きかけを待ちました。朝M児は「おはよう」と走って来ますが、目はあちら。「Mくん、目を見て〃おはよう〃」と毎日働きかけると、最近は私が彼の目を見なかったら「先生、目を見て〃おはよう〃」と叱られました。その頃より友だちが遊んでいる遊びの中で、興味を持てば少しずつかかわれるようになりました。

T児は今まで母親とのスキン・シップが不足していましたので、肌のふれあいに重きを置くと共に、母親の指導も並行しながら、内面での成長を待ちました。少しずつ彼女にとって気持ちの良い状態を身につけようとしています。

（上枚幼稚園）

## ○村上恵子○

Tちゃん、彼女との出会いは入園式の泣き顔でした。集団生活の経験のなかった彼女は、ただ沢山の子どもたちを目前にして驚いてしまったのでしょう。ダウン症の彼女は小さくて、本当に弱々しそうでした。式の後お母様から抱きとってクラスに連れていっても、泣き通しで、悲しそうな声とあふれる涙と、私にしっかりしがみついた力を忘れられません。

こんな彼女も二、三日すると、ままごとコーナーにおいてある粘土でおだんご作りに興味を示し、朝もスムーズに部屋に入り、しばらく他児の遊びをみつめています。三十分位してから「おだんご作ってみようか」とさそうとすぐとりかかり、一時間位持続します。二、三人の女児がままごとを始めると、お皿をとりあげたりするのです。そのす速さに、みんなは唖然として返す言葉もない位なのです。「かしてくださいって言うんだよ」と言うと、その後は必ず「かしてください」と言うようになりました。

五月に入ると他の子どもたちを意識し、頭をポンとたたいてまわったり、皆が静かに座っている時に大声を出し、自己の存在を認めさせようとする行動がみられるようになりました。私たちは「よし、この調子。いよいよいたずらの本領発揮だ。たのもしいよ」などと、毎日かわいいTちゃんの一挙手一投足を職員会議で自慢してしまうのです。また彼女はダウン症独特の心奇形を伴っていますので、激しい運動は彼女自身もせず、私たちも朝の視診

から一日中口唇の色をうかがい、神経を緊張させていました。クラスのマスコットになったTちゃんが休むと、「せんせ、きょうTちゃんお休みや、どうしたんやろなあ。はよ来たらええのに」「せんせ、さみしいやろ」などと子どもたちは口々に言うのです。実際彼女の来ない日は、穴があいたように、いやに静かです。

二学期が始まりますと、園では運動会までに、フォークダンスやリズム的なものを園庭に流します。そんな時Tちゃんは勇んで集まり、彼女独得の笑顔で幾度も試みるのです。その子どもの原点にいるような彼女を、口実をつけて抱きしめたい誘惑をおさえられず、ついには他の子どもたちも寄って来て、私の背中や肩によじのぼり、しがみつくことを許さねばならないことも度々でした。しかしこんな時ほど楽しい瞬間はありません。もみくちゃになって一人一人の子どもと触れていると、胸が熱くなってしまう感激におそわれるのです。

三学期には、「この頃Tちゃんの言っていることがよくわかるし、通じてきたわ」と担任。確かに会話ができるようになりました。暖かい日には外に出て〝最初の一歩〟〝たんすながもち〟にも加わり、ルールの理解もできてきました。こんなに元気一杯の彼女も、寒さが厳しいと血液循環が悪くなり、隅っこにうずくまり、無言で涙をいっぱいに流します。そんな時は、ストーブの側で背中をゆっくりさするのです。やがて体が暖まると、絵本を見たり、歌をうたって一時を過ごします。そのうち一人、二人と子どもたちが集まって、井戸端会議ならぬストーブ端会議が始まるのです。

子どもたちの素直な刺激のすばらしさは、何物にもかえられない宝です。そして園全体が自然な姿で、暖かくTちゃんを育みたいと思います。

（大冠幼稚園）

## ○坂口美枝子○

O児、Y児は共に、うの花養護幼稚園を経てきた子どもである。養護教育担当補助教師である私の立場は、「O児やY児のための先生」ではなく、「みんなの先生」であるために気を使った。その方がO児やY児にある程度の距離を持って観察することができ、また他の子たちがどのようにO児やY児にかかわるかも良く見られたと思う。

また心の通い合いを求めるために、O児やY児に対してともすれば必要以上に甘やかす態度をとりそうになったこともあった。自分では厳しいくらいに接したつもりであったが、同僚から「一回も叱ったことがないのとちがうか」と言われ、改めて自分の態

度を反省したものだった。もちろん叱ったからといって、それが良いわけではないが、二学期あたりまでの私の態度には、彼らの歓心を買おうという気持ちが現われていたに違いない。それで、できるだけO児を遠くから見るようにし、してはいけないことはO児のできうる範囲内で注意するようにした。(Y児には、彼の状態からの判断で、入園当初からそのようにしていた。)その結果、O児にすねたりふくれたりする様子がみられるようになったが、私はその方がO児のためにもよかったと思っている。

この一年を振り返ってみて、一体自分は何を子どもたちにしてきたのだろうか、あれで良かったのかと思うが、一日一日彼らと共に精一杯やってきたことが、子どもたちにとって、これから成長していくために少しでもプラスになっていれば良いと思う。

(芝生幼稚園)

## ○細井妙子○

N児は、うの花養護幼稚園に一年通ったのち、当園に入園して来ました。自閉的傾向のある情緒障害児と考えられます。

当園ではN児に対して大体次のような柱を立てて指導してきました。

**○許容(受容)** 入園当初はN児にとっては珍しいことばかりで探索期と思われるので、多動な行動を殆ど受け入れ、見守るようにしました。ただ危険なことや他の子どもたちに対しては十分配慮するように心がけました。

**○学習(訓練)** 集団では教師の指示を受けいれようとしないので、私(補助教師)がパイプ役として個人的にかかわるようにし、身辺自立や挨拶、順番を待つ、階段の昇降などの指導を、長い目であせらず訓練しました。

**○集団へひきいれる手伝い** 時期を見て無理のないように考慮しました。

**○対人関係をつける** まず教師との心のつながりをつけるように努力し、子どもたちの中で友だちができるように配慮しました。

N児の成長記録から、その変容のプロセスを次のように捉えてみました。

**○探索(多動)**(入園~四月下旬) 園内を歩きまわり、いろいろな器具などをいじり、ドアの開閉、水洗トイレの水流しなどを興味を持ってやりましたが、幸いなことに園外には出ませんでした。

**○自室からの逃避**(四月中頃~五月上旬) 自分の級では拘束を感じるのか、他の級にばかり入って遊んでいました。

**○共生**(六月上旬~七月中旬) いつも教師のあとにくっつき、自分からは何もしなくなりました。くっつく相手は大体担任か私で

したが、時には大人であれば誰にでもくっついて、級の中の特定な子どもを恐れて大人のかげに逃げ込んだり、ひとり歩きもしなくなりました。

○ひとり遊び（七月下旬～九月上旬）　園生活の流れを体得し、自分の級に安定し、自分からしたい遊びをみつけて（積木、絵かきなど）ひとりで遊ぶようになり、また戸外に出て砂遊びでトンネルを掘ったり、二輪車で園庭に線路をかいたりするようになりました。

○友だちとのかかわり（十月初旬～三月）　二学期より転入してきたM君（無口で馴染むのがおそい）といつも行動を共にするようになり、自分からM君の名前を呼んでさそいに来るのがみられ、M君も応じて二人で砂遊び、二輪車の乗せあいっこなど、互いに無口ながら、ある程度意志が通じ合っているように思えました。その頃教師の名前を名指しで呼んでくれるようになったり、級の中で泣いている子どもに反応を示したり、戸外遊びなど、他の子どもたちと平行遊びをするようになりました。三学期になるとM君が級に馴染んできたために、N児から離れてゆき、またひとり遊びになりました。野球、ドッジボール、椅子取り、かるたなど、入りたい様子がみられましたが、ルールを理解しようとしないのでうまく入れないことがよくありました。

○模倣　入園当初より少しずつみられましたが、二学期後半より如実にみられるようになりました。降園の時の並び方、フォークダンス、ごっこ遊びなど、友だちの真似をして自分なりの形で参加するようになり、集団の中で目立たなくなりました。

○自主的行動（一月上旬～三月下旬）　教師が注意するとひどく反発して「いや」「だめ」「おしまい」「あっちへいけ」と言ったり、つねる、押す、たたく、かむなどの動作をすることが目立ってきたり、お弁当の中味がいやな物の時は絶対に食べなかったり、園に来ても遊び着に着替えないなど、自分の意志をはっきり表現するようになりました。また自分から友だちに呼びかけたり、教師に絵本を読んでくれなどと要求してくるようになりました。

私は、一年間N児とかかわってきて、自閉傾向の強い子どもとつながりを持つのは、健体児に比べてはるかにむずかしいことだと思いました。また、指導に関してはまずその子をよくみつめ、その場その場で最も大切なことをよく考えてあたっていかなければならないと思いました。一口に障害児といっても、一人一人違いますので、その子どもに応じた指導を考えてゆかねばなりません。決して書籍などからの知識のみであたってはいけないと思いました。

（赤大路幼稚園）